いきいき通信

広報誌：第61号　令和４年１月12日発行
発信元：〒９９９－８３０１
山形県飽海郡遊佐町遊佐字石田７
順仁堂　遊佐病院　『広報委員会』
ＴＥＬ　０２３４（７２）２５２２
ＦＡＸ　０２３４（７１）２８６５
ＨＰ　http://www.yuza-hospital.jp/
メールアドレス　info@yuza-hospital.jp

遊佐中学校2学年総合学習「職業人に学ぶ」に参加して

看護部長室師長　佐藤里沙

遊佐町立遊佐中学校長　佐藤英喜先生よりご依頼を受け、令和３年11月５日(金)遊佐中学校２学年総合学習に講師として伺いました。今回の授業テーマは、「職業人に学ぶ」ということで、私は病院の仕事と職業人として考えること等の説明を事前にお願いされていました。

病院看護師として普段働いている私にとって初めての経験でした。当日は病院の仕事に興味をもち聞きに来て下さった17名の中学生の真剣な眼差しに応えようと無我夢中でした。高齢化率の高い遊佐町で唯一の病院として当院の担っている役割やどのような専門職が働いているのか、看護師の仕事内容、患者さんやご家族から教えて頂くことから看護について考えたこと、看護師だからできること、看護師としてのこれからの夢等についてお話ししました。

参加生徒さんから、「看護師は命を預かる責任ある仕事」「看護師の具体的な仕事が分かった」「大変だけどやりがいがあると分かった」「人の生き死に関わる素晴らしい仕事」「命は限りあるという話が印象に残った。今いる祖父母との時間を大切にしたいと思った」等の感想を頂きました。私のつたない話から、看護師の仕事だけでなく身近にいるご家族にまで想いを馳せて感想を伝えられる中学生のこれからがとても楽しみに感じました。

誰にでも訪れる生涯最期の時。皆さまはご自身の最期の時間についてどのようなイメージやご希望、願いをお持ちでしょうか。この雄大な鳥海山麓の遊佐町でかけがえのない一度きりの「生ききる」を敬いながら誠実に大切に看護専門職者として、皆様のご希望や願いに少しでも添えるよう仲間と共にお手伝いさせて頂くこと、それが私の看護師としての夢です。今回お会いした中学生の皆さんの中からも将来一緒に働ける方がいらしたら嬉しいなと感じたところです。遊佐町唯一の病院として少しでも地域の皆様のお力になりたい、そんな想いで職員一同精進して参りたいと存じます。

「訪問看護」をご利用ください。

訪問看護とは、かかりつけ医の指示を受けた看護師等が病気や障害を持った方の生活場所である自宅等に伺い、その人らしい療養生活を送れるように支援するサービスです。

＊どんな人が対象なの？
赤ちゃんからお年寄りまでのすべての年齢の方が対象となります。疾病、障害を持ち療養しながらご家庭で生活されている方、ご本人だけでなくご家族をもサポートいたします。

＊医療処置はないけど訪問看護を頼んでもいいの？と悩んでいる方いませんか？
「大丈夫です。こんな方が利用されています」
・急に食欲が落ちて元気がなくなった　・足腰が弱ってきて一人でお風呂に入るのが不安　・寝たきりにさせたくない　・寝たきりになった家族の介護方法がわからない　・床ずれが出来た、床ずれ予防をしたい　・便秘になりやすい　・痰が多くて吸引が必要　・カテーテルが入っているけど管理の仕方がわからない　・退院したばかりで日々の生活に自信がない　・がんと言われた、残りの時間をゆっくり自宅で過ごしたい　・医療処置が必要…などなど。
まずはご相談ください。その人らしい療養生活を一緒に考えます。

訪問看護ステーションゆざ
管理者：池田真由美
TEL：0234-28-8166

新年のごあいさつ

令和４年を迎えて

順仁堂遊佐病院　院長　佐藤　卓

明けましておめでとうございます。今年は寅年です。古来日本では寅に対する人々の心象は良好でした。何よりも強いものへの憧憬とともに、子供への健やかな成長の願いが込められています。皆さんもこの新たな年を、希望を持って迎えられていることと思います。しかしながら足掛け三年に渡るコロナウイルスとの戦いは、年を越えての変異ウイルスの出現もありこれから更に続くとの世界的な見識です。昨年は政治経済の混迷と停滞への懸念が残る日々でしたが、これもコロナ感染がなかなか終息しないことでの一因かと思われました。

昨年末までに世界では二億八千万人に迫る患者数を数えており、死者も五百五十万人近くになっています。そもそも人類にとって感染症との戦いは、今日に至るまで長きに渡り続いております。広く知られているのは中世ヨーロッパで人口の三分の一以上が命を落とした、黒死病と言われたペスト菌の感染があります。そして有史以来多くの人々を苦しめて来たのは痘瘡と言われた天然痘ウイルス感染で、日本においてもそれは良く知られており恐れられて来ました。伊達政宗が幼少期に片目を失ったのはこの感染によります。コレラや結核などの感染症は治療法の確立が得られていなかった古い時代には、神仏に頼ることで自分の運命を天にまかせるしかなかったのです。

その一方それらの感染症との戦いの中での救いは、人類の英知が多くの病原菌やウイルスの感染の封じ込めに成功して来ているとの事実です。中でもその輝かしい成功例が天然痘ウイルスの撲滅でした。１９８０年に世界保健機構（ＷＨＯ）はこのウイルスの絶滅を宣言しています。それは英国の外科医だったジェンナーが免疫の仕組みを利用しての、ワクチン接種による治療法を確立させた成果でした。

ワクチン接種による天然痘予防は世界中に広まることになったのですが、庄内において種痘施術に貢献したのは安政元年に遊佐で医院を開業していた佐藤意泉です。彼は千葉佐倉の医塾、順天堂で学んだことがありましたが、帰郷して後にその種痘法を実践したのでした。それは官の認可を得た明治八年のことでした。奈良時代以前に天然痘は日本に伝播しており、以来流行を繰り返し多くの人命を奪って来ていたのでした。しかし種痘の普及により今日では、我々もその患者を実際に診ることはありません。

さてコロナウイルスの趨勢です。そのパンデミックな流行の波はまだ治まったとは言えません。とは言えワクチン接種の効果は確実にみられており、現状では地域的な特定感染であるエンデミックな波に移行して来たようにも思われます。しかしながら今年一年間はまだまだ気を許すわけにはいきません。遊佐町内においても、もうすぐワクチンの三回目のブースター接種が始まります。その効果は間違いなく、抗体価を上昇させていると臨床研究の結果で明らかです。もし感染したとしても重症化を防いでくれているようです。それにしても大事なこと、それはやはり基本的な自己防衛が必要であるとの考えです。すなわちマスク、手洗い、そして三密（密閉・密集・密接）を避けることが肝要なのです。では皆さん今年も健康が第一です。さあ希望を持って頑張って参りましょう。どうぞよろしくお願いいたします。

第2回 つぶやきリレー「当たり前にありがとう！」

年末年始に帰省した娘がアップルウォッチなるものを腕に巻き付けておりました。時計機能はもとより、お財布・通信・健康管理までできてしまう文明の利器。思えば新型コロナウイルスが出現してから出かけることもままならず、すっかり運動不足・筋力低下に陥ったのは私だけでなく娘も同じ。毎日の消費カロリーを表示したり、デスクワークで座りっぱなしが続けば‘そろそろ立ち上がりましょう’などと発声してくれるのだとか。私も欲しいなぁと眺めながら仕様を聞いてみると、昭和のアナログ脳と化している私には宝の持ち腐れになる?!　最近スマホで見つけた名言です。　「当たり前が身につくと感謝は姿を消します。　朝目覚めるのは当たり前　呼吸するのは当たり前　生きていることは当たり前　当たり前にはなんの幸福感もありません」　コロナ禍で、今まで当たり前と思っていたことができなくなって、それまでの幸せを再認識しましたが当たり前と思っていることが意外と沢山あると考えさせられました。文明の利器がなくても家族が元気に暮らしている。その当たり前を幸せと感謝しながら過ごしていきたいと思います。

検査科主任　小野美佳